

そよかぜ通信

●巻頭言
次期学習指導要領を
踏まえた授業改善

「子ども自身が『主体的・対話的で深い学び』を
実感できる授業を目標として」

国士館大学教授 藤井千恵子

2

●提言
意図的・計画的な準備で
生活科の授業を

実りあるものに

東京都葛飾区立宝木塚小学校校長
小高和子

4

●スタートカリキュラム特集
管理職(教頭)として取り組む

幼保小「連携」と
「接続」の一提案

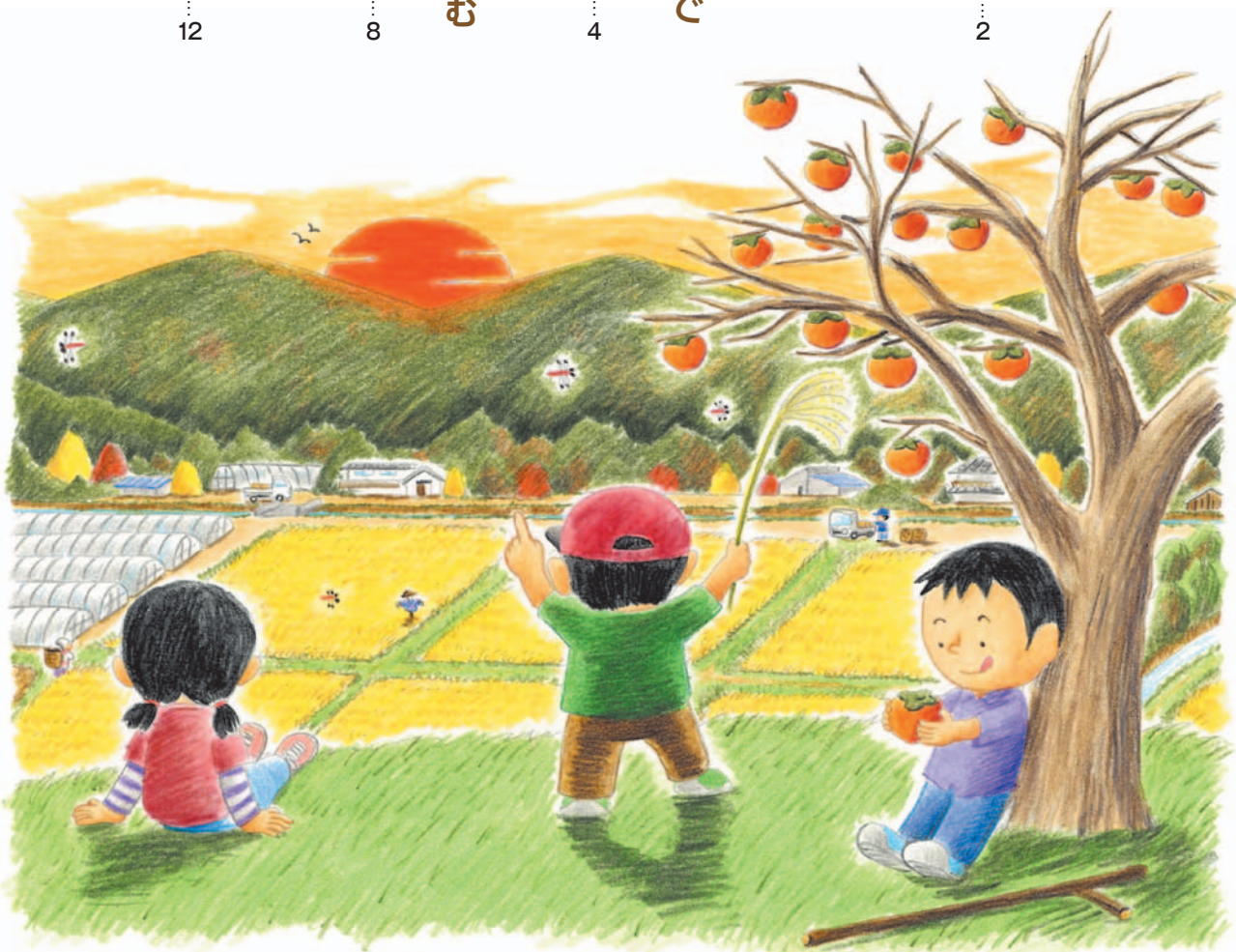
岐阜県山県市立
伊自良南小学校 教頭
大山夏生

8

●こだわり館嘆符! ①
学校給食歴史館

埼玉県北本市

12



次期学習指導要領を踏まえた授業改善

～子ども自身が「主体的・対話的で深い学び」を実感できる授業を旨として～



国士舘大学教授
藤井千恵子

子どもたちが、自分
で作ったおもちゃを手
に体育館に入ってきた。
おもちゃづくりの
学習、12時間抜いの5
時間目の授業である。

きょうの授業のめあては子どもの様子を見れば明らかである。「早く作りたい、もっとよい動きのおもちゃにしたい、体育館（広い場所）で思い切り自分のおもちゃを動かしてみたい」子どもたちの様子からこうした思いや願いに満ち溢れていることが見て取れる。

しかし、教師は研究主題である「対話」に力を入れたいと考え、「どうしたらもっとうまく動かか友達と考えよう」というめあてを提示した。対話を成立させるために「友達と考える」ことを中心にしたかったのだろう。子どもたちのもっていた思いや願いと教師の意図にずれが生じている。

この単元指導計画では、子どもの思いや願いを大切に育てるために、単元の導入では教師が自作したおもちゃを提示して遊ばせたり、さまざまな材料を用意したりして子どもの思いや願いを丁寧に引き出してきた。こうしたプロセスがあったからこそ子どもたちが自分のおもちゃに愛着をもち、よりよい動きにしたいという思いや願いをもち、本時に臨んでいたのである。

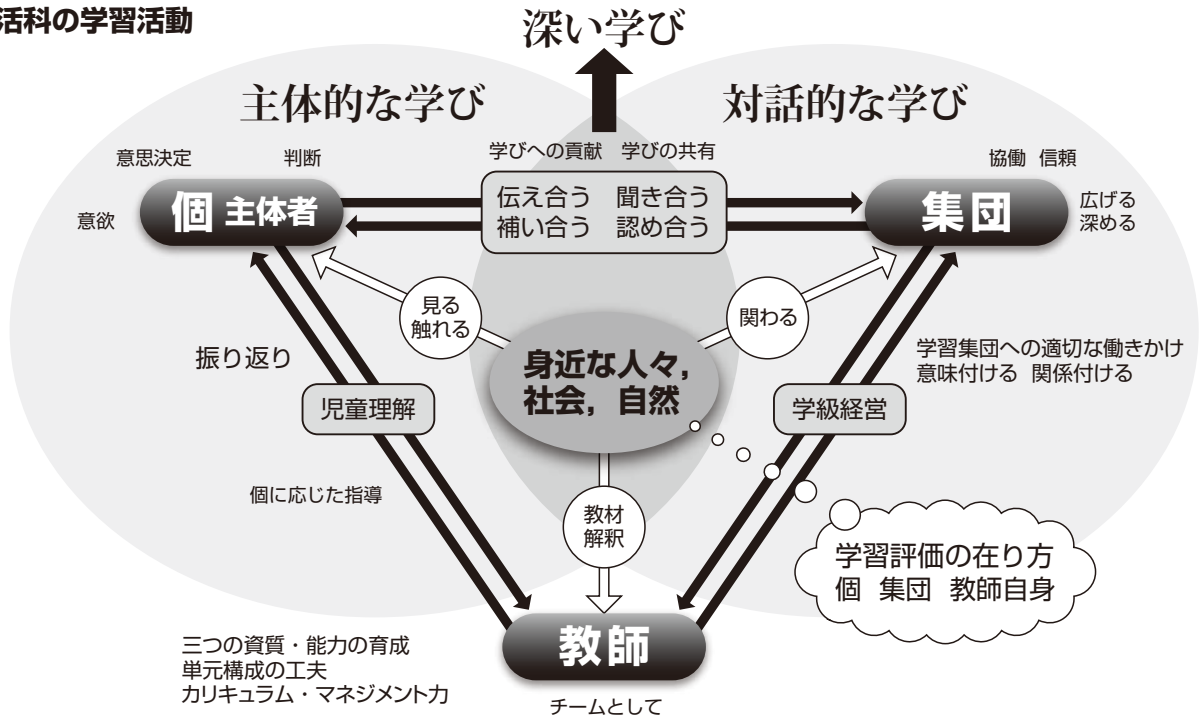
子どもたちはすでに「もっとよい動きをするおもちゃにしよう」というめあてをもっていた。主体的な学びが始まっていたのである。

ゴムの太さや本数は異なっても「とことこ車」を作っている A 児と B 児は、同じ場で動かしている。最初はそれぞれが自分の車を動かして楽

しんでいた。しかし、どちらも動きがごちないことに気付く。そこで、仕組みを見せ合って、改良しはじめた。ゴムの本数にこだわる B 児、よりスムーズに動くことにこだわる A 児、道具や材料コーナーに行き、いろいろと試しては動かすという活動を行っていた。ここには対話する子どもの姿がある。必要に迫られ、相手から情報を引き出し改良することを繰り返す。こうした活動を通しておもちゃは進化し、授業の終わりころには滑らかな動きをすることこ車となっていた。2 人の子どもはいずれも満足そうに、そして大事そうに自分のおもちゃを手に教室に戻っていった。

一方、紙コップで風車を作っていた C 児は紙コップの切り込みを幅 1 cm にも満たないほど細く切っていた。当然、風を受けることができず回らない。そこに D 児が近づいてきて、「それじゃあ回らないよ、もっと羽根の幅を広くしないと…」と一言声をかけて、そのまま自分のゴムで動く車を走らせる活動に戻っていった。風車を作っている児童は C 児だけであったこともあり、C 児は、この言葉かけがあったにもかかわらず改良せず、そのまま授業が終了した。教師には、C 児のおもちゃづくりに寄り添い、よりよい動きをする風車を見せて一緒に改良する支援が必要であった。C 児のもっとよく回る風車にしたい、という思いや願いの実現を後押しすることこそ教師の大切な役割である。手をこまねいては子どもの思いや願いを実現させることはできない。対話が成立せず、教師の支援の手が届かなかったことが悔やまれる。

本時の終末では、ワークシートに「ともだちから聞いたこと、ともだちに教えたこと」を書く時



間が設定されていた。しかし、自分がかんばったり工夫したりしたことを書く欄がない。A児は、自分から友達に働きかけて改良した自分自身の工夫と、滑らかな動きになったことこ車のことを書きたかっただろう。「対話」をしなければならない、友達との教え合いを書かなければならない、という指導は、子どもたちの一人一人の工夫や努力をないがしろにすることにならないか。

「主体的・対話的な学び」を子どもたちが実感できるようにしたい。自らの思いや願いを実現したことへの喜びや自信をもたせたい。友達と話したり、情報交換をしたりするとよいことがある、話し合うことはよりよい結果に結びつく、といったことを実感させたい。対話の意味と価値を子ども自身が実感してこそ、深い学びにつながると考える。

そのために、教師は生活科の各単元の目標や内容について、育成すべき資質能力の三つの柱「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」「知っていること・できることをどう使うか

(思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」の視点から解釈することである。そして、子どもの実態にふさわしい学習材（教材）や場の設定、適切な働きかけ（言葉かけ）に全力で取り組むことが求められる。対話をせざるを得ない状況や場を設定することである。

先の授業では、体育館という広い場で思い切り活動できる場があった。さらに、改良に必要と思われる材料もすぐに手に入れることができるように環境を整え、同じおもちゃどうしが情報を交換できるような場を設定していた。そのうえで、教師は、一人一人の子どもがどのようなおもちゃをつくり、そのプロセスの中でどこにつまづいているのかを見極めて、個に応じた言葉かけを想定することである。

こうした積み重ねが、子どもにとって真の主体的・対話的で深い学びを具現化させる。図に示したように学習の全体像をとらえた授業を行いたいものである。

意図的・計画的な準備で生活科の授業

東京都葛飾区立宝木塚小学校 校長
小高 和子

＜失敗から＞

研究会などに参加すると「生活科は初めてなのでどうしたらいいかわかりません。」という意見をいまだに聞くことがあります。そんな時に思い出すのが、今から20年以上前、自分自身の初めての生活科の研究授業の時のことです。2年生のおもちゃ作りでした。牛乳キャップを2枚重ねて車のタイヤを作っていたA君。本当は2枚のキャップの間に隙間を作り、竹ひごを通して固定して、くるくる回したかったのです。2枚にしたのは強くしたかったからです。しかし、2枚を貼りつけてしまったため、どうにもうまく回りません。目の前でA君の悪戦苦闘をずっと見ていましたが、不勉強だった私は生活科は見守るもの、指導をしてはいけないと思込み、本当は見ただけでした。A君にとっては、どのようにしたらいいのかという支援も与えられないままの失敗体験だけが残ってしまったのです。その後の協議会で、厳しい指導が相次いだのは言うまでもありません。そんな失敗から始まった生活科の授業でした。

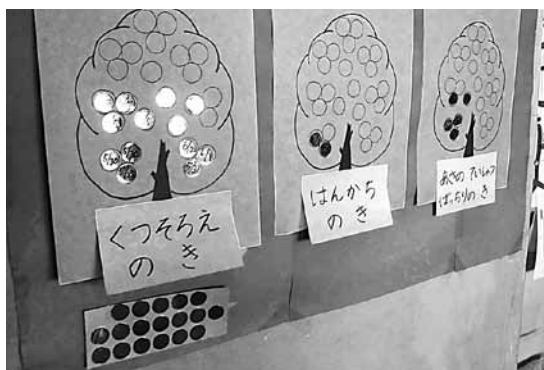
具体的な体験を通して学ぶ教科だからこそ、教師の意図的・計画的な準備や見通しが必要です。この時間を通して何をさせたいのか、どんな力をつけるのか、教師自身が明確になっていなければただの活動で終わってしまいます。学習環境づくりも含め、意図的・計画的な授業作りの視点で経験から学んだことを述べたいと思います。

1 教師の意図的・計画的な準備

入学したばかりの1年生は、毎日の生活が不安だらけです。2年生も、進級した喜びはあるものの、学校によっては、担任が変わったり、クラス替えがあったりと、不安な気持ちはあることでしょう。まずは、子どもたちが安心して安全に過ごせる環境づくりが必要です。生活科においては、経験を通して

いろいろな気づきをする子どもたち。その気づきを自覚できるような授業準備をしていきたいものです。

本校の1年生の実践として、クラスの実態から担任が感じている生活面での課題を3つ挙げ（このクラスは、靴をそろえる・朝の提出100%・ハンカチを身につける）、全員ができたら担任から壁の台紙に金のシールがもらえ、それぞれの木が金のシールでいっぱいになると「金のみレク」を実施するということをやっています。入学間もない1年生にとっ



▲生活習慣を身につける「金のシール」

て、楽しみながらみんなで協力し、保護者にも協力を仰ぎ、一緒に取り組むことで課題克服に意欲が高まっています。入門期の1年生にとって楽しみながら、無理なく生活習慣をつけていくことは大切なことです。子どもたちがスムーズに学校生活を送れるようにするために、ここでも教師の意図的な準備が必要です。

2 意図的・計画的な準備

(1) 植物を育てる

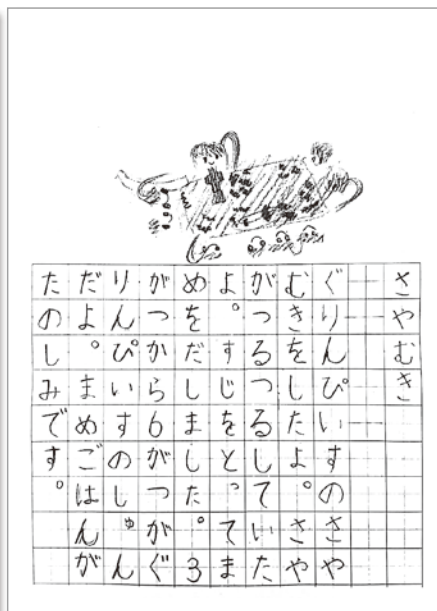
植物に興味を向ける環境づくり

1年生はアサガオ、2年生はミニトマトという学校が多いと思います。みんなでアサガオの種をまき、大きくなってきたら支柱を立てて観察をする。しか

を実りあるものに



▲アサガオの観察日記



▲「さやむき体験」カード

というのも、興味が高まりました。ただし、この場合、教師がそれぞれの育て方を事前に確認しておく必要があります。

また、アサガオにしても野菜等にしても、うまく育たない場合もあるので、その時のために教師が子どもたちと同じものを何種類か用意しておくことも必要だと思います。どちらにしても、自分たちから進んで育てたい

し、子どもの気持ちはどうでしょうか。自分から植物を育ててみたいという気持ちになっているのでしょうか。

まず、教室の一角に「先生、種を見つけたんだ。」などと言いながら、それとなく棚の上に種と、関係する本を置きました。子どもたちは最初はあまり興味がなさそうでした。ただ置いてある種が変化しないからです。でも、今までの経験から土に植えたら芽が出るのではと気付き、土に植えて育ててみたいという気持ちが出てきて、興味をもって種まきができました。さらに、ツルが伸びてきたときにあえて支柱を立てず、そのままにしておきました。ツルが伸び、隣の子のツルとからまりはじめ、何だかよそで見るアサガオと違うことに気がつく子どもたち。ツルの巻き方や手触りから新しい発見がありました。3年生の理科の学習へつなげていけると思います。

2年生についても、状況が許す限り、鉢で育てられる野菜等を家族と相談して、自分たちで選ばせる

と思う気持ちを養っていくことが、長期間の栽培活動には大切です。

観察カードに関しては、書く観点を明確にしておくこと。たとえば、見る(目)・嗅ぐ(鼻)・触る(手)・聞く(耳) 感じる(ハート)等を絵カードにして黒板に貼っておく。これは国語との関連で進めることができます。観点がしっかりしていると子どもも書きやすく、教師の見取りもやりやすいです。

(2) おもちゃ作り

①子どもが材料を選択できる準備

割り箸鉄砲を作っていたB子さん。飛ばす弾は牛乳キャップでした。丸いままでは飛びません。そこでぎざぎざにして輪ゴムをひっかけるとよいことに気がきました。ここで牛乳キャップに切り込みを入れるのですが、子どもなりに試行錯誤を重ね、ぎざぎざにするのか、山型にするのか考えます。試しながらいろいろな発見が生まれます。この際、大きさ

や形など、すぐに使えるようにしたものを用意して選ばせるのか、紙やゴムのように材料だけを用意し、自分たちが使いやすいように考えて作らせていくのかは、発達段階や実態に応じて準備しました。材料等は家庭の協力も必要ですが、ペットボトルや割り箸、竹ひご等は常に用意しておくとすぐに使えます。そして何よりも大事なことは、教師が必ず事前に制



作しておくこと。これによって、どこで子どもたちがつまづくのか、どこが危険なのかがわかります。教師が準備をしっかりしておくことが、子どもたちの気付きやつまづきの把握につながり、適切な指導ができるようになります。

②異学年・幼保小の交流

作ったおもちゃで遊ぶ機会の中には、〇〇まつりや1年生を招待しよう、幼稚園や保育園の子を招待しようというような交流の場を設定することも多いと思います。1年生を招待して遊ぶ準備をしていた時のことです。

普段は発言も少なく、授業にも消極的なC子さんですが、このときは魚釣りのお店の中心になり、糸の長さや魚の絵につける磁石の位置など、1年生がやりやすいように何度も確認していました。

授業の最後の振り返りで、自分から手を挙げ、「1年生の時にやってもらったお祭りがすごく楽しかったから、今度は2年生になったので1年生を楽しませてあげたいと思います。だから、1年生がやりやすいようにいろいろ考えました。」と発言してくれ



ました。

1年生の時のことを思い出し、成長した自分のことも話してくれました。教師がねらっていた発言を聞いたとき、この瞬間があるから頑張れる、と思えたとてもうれしい時間でした。

もちろん、事前に自分たちが楽しむ時間を十分にとりました。満足した子どもたちに今までの経験を振り返らせて、だれかに伝えたいという気持ちを高め、何のためにお祭りをやるのかを繰り返し意識させたことで、子どもたちも目的意識が明確になりました。



1年生にとっても、そろそろ進級という頃に、4月に入学する1年生を招待することがあると思います。年度当初から計画的に近隣の幼稚園や保育園と連携をとり、展覧会や運動会などの行事や練習風景を見に来ていただいたり、学校に慣れてきた1年生が幼稚園児や保育園児を連れて学校案内をしたりと

意図的・計画的な準備で生活科の授業を実りあるものに

いう活動を行いました。繰り返し関わりをもつことで1年生の意識が高まるだけでなく、未就学児にとっても学校が身近に感じられ、入学後の不安も軽減されると思います。生活科とは直接関係ありませんが、近隣の保育園からの要請で、副校長の時には養護教諭と一緒に保育園の保護者会で入学前にしておくことや、入門期の1年生の様子などをお話しさせていただきました。最初は、卒園を控えた時期に設定し、年長の保護者が対象でした。卒園間近では準備ができない。年度の初めに話を聞いてゆっくりと心構えを作っていくという保護者からの要望で、次の年からは年度の初めに設定し、対象を年中の保護者にも拡大しました。保育園とのこのようなやり取りの中からもお互いに情報交換ができ、学校側としては入学前にお願ひしたいことが伝えられ、保護者にとっては入学前の不安を取り除く機会ともなり、有意義な時間を過ごすことができました。幼保小の連携という観点から考えると、授業だけではなくこのような連携も積極的に取り入れていきたいものです。

(3) 思わぬ展開から学んだこと

四季の変化を感じられる頃、校庭で季節見つけをした時のことです。そろそろ学校にも慣れてきた1年生の子どもたちと校庭に出ました。色とりどりの花が咲き、木々の緑も濃さをまし、空も青く気持ちの良い日でした。子どもたちにも季節の様子に気付いてほしいなと思いつつ、教室へ戻りました。すると、ほとんどの子どもたちがグーの手をしています。何を持っているのか聞いてみると、なんとダンゴ虫でした。みんなとつてもうれしそうに見せてくれ、今日から教室で飼いたいという子が続出しました。そういえば、花壇の葉っぱをひっくり返す子がたくさんいたことを思い出しました。虫探しを予定していなかった私は慌てました。「ダンゴ虫のお家は どうするの？ このままじゃかわいそうだね。」と言うと子どもたちは確かにそうだと思いつつ納得がい

かない様子。「お家もご飯もない教室ではかわいそうだね。どうしたらいいのかな?」と問いかけると、みんなで調べてくるということになり、しぶしぶ元の花壇に返しました。そうはいっても、明日には忘れているのではないかと感じていましたが、翌日になるとうれしい誤算でした。一番飼いたがっていたD君は、日頃の学習にはあまり興味がありません。しかし、彼はダンゴ虫に関する本を持ってきて、さらにお家に必要だと、土や枯れ葉まで用意してきました。他にもインターネットなどでお家の人と一緒に調べたという子や、プラスチックの容器を持ってきてくれた子もいて、一気にダンゴ虫コーナーができ、子どもたちは満足そうでした。季節の変化を見つける予定が虫を育てることになり、思わぬ展開に一番びっくりしたのは担任でした。自分たちで見つけて興味をもったことに対して、子どもたちはこんなに集中して取り組むんだということ、1年生でもこんなに行動力があるんだということ子どもたちから学んだ瞬間でした。同時に、この時間の目的が明確でなかったことと、見通しの甘かった反省点とともに、子どもの視点は実にさまざまであり、大人の感覚では計り知れない思考の柔軟さを感じ、子どもの目線で考えていくことの大切さを教えてもらいました。

<おわりに>

クラスでも発言力があり、乱暴な行動が目立ったE君。しかし、彼は実に細かい部分にもよく気付き、おもちゃ作りではリーダー性を発揮し、友達に教える場面が随所に見られました。生活科の授業をやっていないれば気がつかなかったことでした。漢字が書けるようになった、計算ができるようになったというような目に見えない部分での子どもの成長を見つけ、評価し、力を伸ばすためにも教師自身が準備を怠らず、感性を磨いていきたいものです。子どものもつ素晴らしい力を引き出す授業づくりをしましょう。

管理職(教頭)として取り組む 幼保小「連携」と「接続」の一提案

岐阜県山県市立伊自良南小学校 教頭
大山 夏生

1 はじめに～問題の所在～

次期指導要領の総則の中に、「学校段階等間の接続」が新しく記述され、幼稚園教育要領に新設された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫することが求められた。さらに、小学校入学当初においては、学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定などの工夫を行うことが明記されている。

しかし、学校現場に目を向けると、幼保との「連携」は打ち上げ花火的なイベント行事であったり、「接続」カリキュラムの編成・実施率は62.5%(H26年度岐阜県調査)であったりなど、厳しい状況が続いている。また、現任校においても、赴任する前までは保小交流の機会は少なく、接続カリキュラム(以下、スタカリと記述)も機能していなかった。

そこで、私は、現任校において、教頭として、自分ができることは何かを考え、「幼保小双方にとって意味のある交流」と「スタカリのリメイク」を実践課題として捉えた。

2 実践1「幼保小連携」

はじめに手がけたのは、「人の交流」である。教頭が毎月の学校だよりを園に届け、互いの顔が見える交流にした。そして、担任とのつなぎ役を担って行事についてのミニ計画・反省の場をもった。その信頼関係を土台にして、さまざまな交流行事のコーディネートを行った。実際に本校3年間で新規に取り入れた交流行事・活動は以下のようである。

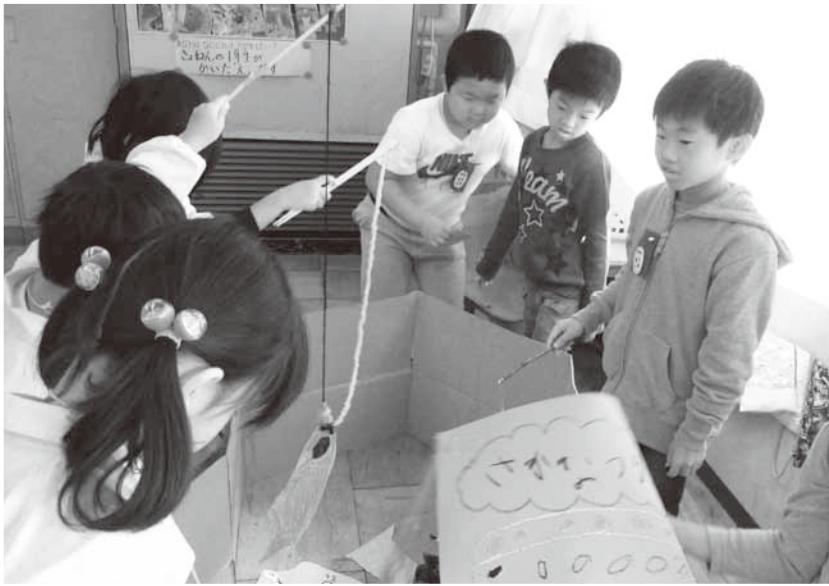
幼保小連携改善の視点

【連携・交流の年間計画】

- 4月: 保育園・健康介護課による授業参観
- 5月: 年長児童による運動会の参加
- 8月: 管理職による保育園参観
- 9月: 特別支援コーディネーター・1年生担任による
保育園参観(特別支援個人計画作成支援:CLM)
- 10月: 就学時健診(保護者の不安聞き取り)
- 11月: 秋のおまつり会へようこそ
(1年生秋単元での交流会)
- 2月: 一日体験入学&保護者説明会
「校長によるスタカリ説明」
- 3月: 入学前情報交流会
(管理職・特別支援コーディネーター・1年生担任)

(1) 実践① 他学年(5年生)との交流

本校の運動会は4年前から5月開催となったため、私が赴任した時には、それまでに行われていた「年長さんのかけっこ」が廃止されていた。「年長の5月では、できないのではないか」という小学校側の勝手な思い込みからである。しかし、5月開催ということチャンスを捉え、年長になりたて、5年生になりたての子どもたちだからこそできる競技＝「ふれあい玉入れ」を提案し、交流の計画・運営を5年生担任と共に行った。こうして5年生は年長児と関わることで相手の立場に立って考えたり行動したりすることを学び、6年生になった時に最高学年として1年生に温かく接することにつながった。学校全体で1年生を育てる視点をもつと共に園児と関わることで上学年も育つという「Win-Win」の関係を築くことができた。



▲あきのおまつり会の様子

こと」と「自分が年長さんの時に教えてもらってためになったこと」を思い出し、「あいさつ・ランドセル片付け」「ひらがな」「八の字跳び」コーナーなど、学習・くらしの体験コーナーを計画・運営した。この交流によって、年長児は入学に対するあこがれや見通しをもつことができ、1年生は、年長児と関わることを通して自分自身の成長への気付きを深めることができた。

また、同日に開催した

(2) 実践② 1年生との交流

1年生との交流活動は生活科の単元に位置付け、年長児・1年生双方に互恵性のある交流となるように、1年生担任と共に計画を立てた。

【あきのおまつり会】の実践

(1年生生活科「あきとなかよし」単元)

単元の終末に1年生が生活科でつくった秋のおもちゃで年長児と一緒に遊ぶ活動を行った。「秋の木の実で年長さんを楽しませたい!」という願いのもと、1年生各自が創意工夫したコーナー遊びを展開した。

この活動によって、年長児は入学への期待感をもち、1年生は、自分たちの思いや願いをもとに活動する充実感を味わうと共に、できるようになった自分への自覚をもつことができた。

【わくわくもうすぐ1年生だよ!の会】の実践

(生活科「できるようになったよ」単元)

1年生が「自分ができるようになって自慢したい

「入学説明会」では、校長から、保護者に向けて、スタカリの説明を行った。就学時健診の時に行った「入学に際しての不安」の保護者聞き取りに応じ、「これまでに身につけた力を引き出す」指導をすることを説明した。このように、入学を学校全体で支えることを示すことで、入学に際しての保護者の安心感や心構えをもってもらうことにつながった。

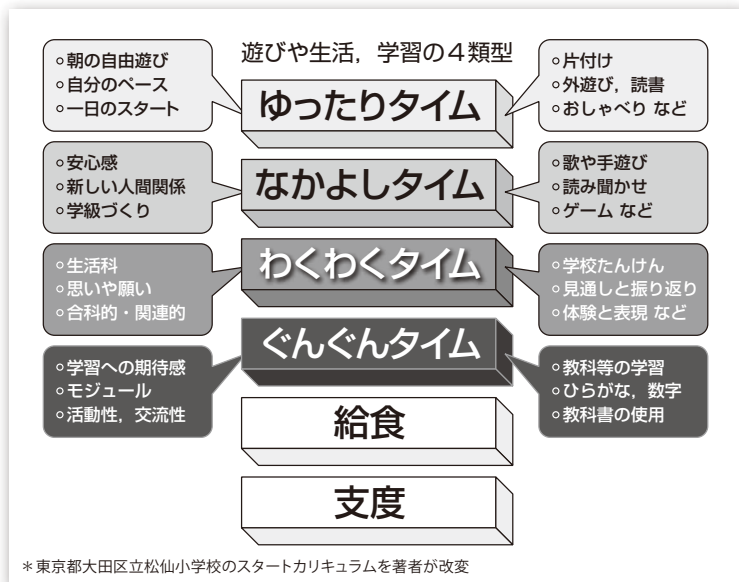
③実践2「スタカリリメイク」

本校のスタカリ実践は、昨年度から本格実施してきた。昨年度の実践の概要は以下のようである。

- ①教頭：まず、「型」を担任に示した。
- ②担任：実施しながら週案に修正を書き込む。
- ③担任と共に修正をもとに来年度のスタンダードをつくる（夏休み）。
- ④教頭：幼保からの情報・来年度行事を入れ込んだ最終版の作成（年度末）。

そこで、できあがったスタカリスタンダードをもとに本年度は次の流れで行った。

基本的な考え方(何のために)



また, 毎日放課後に担任と共にその日の実践を振り返り, 子どもの実態に応じて柔軟に活動を変えていくスタンスをとった。

(1) 実践① 安心感をつくりだす

【ゆったりタイム】



登校後, 始業前の時間。1年生教室に6年生や2年生がボランティアで来てくれることで, 片付けや名札付け, 外遊び, 学校たんけんへといざなってくれる。小規模校のよさであるが, 前年度からの関わりがここでも生きてくるのを実感する。1年生は, 安心して「やってください。」と言えるようになり, すぐに朝の支度ができるようになった。こうして朝の準備が早くなると, このゆったりタイムは園での自由遊びのように, 自分で選んで過ごす時間となる。ゆったりとした時間の中で, 従来の適

応指導が自然な流れででき, 担任にとってもまさに「ゆったり」としたスタートを切ることができた。



【なかよしタイム】

1時間めは, 「なかよしタイム」である。子どもたちが知っている

手遊びで盛り上がりたり, ハンカチ落としや椅子とりゲームをしたり, グループ対抗のゲームやグループの名前を決めたりするなど, 心をほぐし, 仲間との信頼関係を結ぶのに絶好の時間となる。担任は, すべてのゲームを熟知していなくてもいい。子どもたちが, 教えてくれる。だれでも, 自分が知っていることを話すのは楽しいものだ。

こうして, 1年生は, 安心して学校生活に臨み, 仲間と助け合うことのよさを実感し, さらに自分が今までやってきたことが使える! という自信をもって, 学習に向かっていくことができた。



管理職(教頭)として取り組む幼保小「連携」と「接続」の一提案

(2) 実践② 子ども主体の学びをつくりだす 【わくわくタイム→ぐんぐんタイム】

生活科を中心とした合科・関連を意識した授業というのは、言い換えると子ども主体の学びのストーリーをつくることである。

そこで、「ゆったり・なかよしタイム」で育んだ安心感をもとに、担任は意識して、「幼稚園・保育園ではどうだった?」「これからどうしたい?」といった言葉掛けをし、園での経験や自分たちでやってみたいという主体性を引き出すようにした。



まず、「なかよしタイム」で行ってみたい学校の場所を子どもたちから出させた後、「わくわくタイム(生活科)」に、「学校たんけん」に出かける。理科室で冷蔵庫を見つけたり、ひみつの扉を見つけたり。家庭科室の机の電源差し込み口を見つけたり、黒板が動くことを見つけて驚いたり、「はっけん」や「はてな」をいっぱい見つける子どもたちである。こうして教室に戻ってくると、子どもたちは「伝えたい」気持ちでいっぱいである。その気持ちを捉えて、絵に表したり、言葉で表したりといった表現活動につなげることができる。言葉で伝えるための「話し方」や見つけたものを文字で書くためにひらがな表を用いるなど国語の授業にいきなっていく。また、



体育館で発見した床の円形の線とボールでころがしドッジをしたり、音楽室で見つけた楽器とステレオで教科書の曲を歌ったりなど、「学校たんけん」の学習を中核にして、国語、図工、体育、音楽など他教科の学習へと「学びのストーリー」をつくることで、子ども主体の授業づくりになっていった。

こうして過ごした1年生は、安心と自信をもとに、のびのびと学校生活を送ることができていったので、2週間を過ぎた辺りで徐々に「なかよし・わくわくタイム」の比率を減らし、上級生と同じような時間割で過ごすことができるようになった(執筆時5月初旬)。

4 おわりに～成果とこれからのこと～

管理職として、幼保小連携とスタカリリメイクに取り組むことで、学校体制で1年生を支えることの意味を実感することができた。次期指導要領では、「カリキュラムマネジメント」の重要性もうたわれているが、まさに「スタカリ」はカリキュラムマネジメントの力が必要とされる。そこへ、管理職が入り、担任と共に試行錯誤しながら、PDCAサイクルを回していくことで、よりいっそう、子どもの実態に応じたカリキュラムをつくりあげることができ、自ら学ぶ力を身につける子どもを育成することができる。「スタカリは1年生担任だけの仕事」ではない。管理職の意識改革も重要な要素であると実践を通して、強く感じている。

学校給食 その歴史と知られざる工夫を学ぶ

館長 大澤 次夫

学校給食歴史館について

多くの方々が経験したことのある学校給食。あなたは、学校給食にどんな思い出があるでしょうか。

公益財団法人・埼玉県学校給食会が運営する「学校給食歴史館」は、学校給食の歴史等がわかるとともに、当時のいろいろな思い出がよみがえる全国でもたいへんめずらしい施設です。



学校給食歴史館内の風景

本給食会は、昭和31年の設立以来、埼玉県教育委員会、市町村教育委員会等と密接な連携を図りながら学校給食用食材の安定供給と学校給食の普及充実事業を行い、埼玉県の学校給食の発展とともに歩んでまいりました。

そこで学校給食の歴史資料等を収集し、多くの方々に学校給食についての理解をより深めていただくとともに、食育の推進にも役立つことのできる「学校給食歴史館」を、平成22年4月1日に開設し、同年7月1日に一般公開をいたしました。

展示内容は、学校給食発祥の地記念碑のレプリカや学校給食の歴史年表、年代別の代表的な給食献立のレプリカ、学校給食用食器の変遷、埼玉県内対象の学校給食調理コンクール入選献立のレプリカ、県内農畜産物を活用した給食用食材のレプリカ、各時代の給食風景などです。

また、食育や衛生管理用のDVDなどが視聴できるライブラリーコーナーと資料室があります。



ライブラリーコーナー

給食献立の歴史

明治22年



献立内容：おにぎり、塩鮭、菜の漬物

大正12年



五色ごはん、栄養みそ汁

学校給食発祥の地

日本の学校給食は、明治22年、山形県鶴岡町(現在の鶴岡市)の大督寺境内にあった私立忠愛小学校が最初とされています。

当時、鶴岡町の常念寺というお寺に、佐藤霊山という和尚さまがいました。この頃は、家庭が貧しくて学校へ通えず勉強ができない子供たちがたくさんいました。霊山和尚は、この子供たちを学校へ通わせてあげたいと考え、ほかのお寺のお坊さんたちと協力して、大督寺に新しい学校を開きました。



山形県鶴岡市にある現在の大督寺

学校では、お坊さんやお医者さんたちも協力して勉強を教えました。また、貧しい子供たちが安心して勉強できるよう必要なものはすべて学校が用意をし、ただお弁当だけは、家から持ってくるようにしたそうです。ところが、お昼の時間に食べていない子供たちがいることがわかり、聞いてみると、家が貧しくてお弁当を持ってこられないことがわかりました。

そこで、お坊さんたちは相談をして、お弁当を無償であげることにしました。そのためにお坊さんたちは、各家庭をまわり、托鉢や寄付を募り、集まったお金やお米で貧しい子供たちにお弁当を提供したそうです。

学校は、明治30年の火災で焼失し、廃校となりますが、当初の精神を受け継ぎ、名を「忠愛協会」と改め、貧しい子供たちに必要な学用品や弁当などを昭和20年まで援助をしたとのことでした。

先人たちの精神を尊び、昭和34年11月に大督寺境内に「学校給食発祥の地記念碑」が建立されました。



歴史館入り口にある「学校給食発祥の地記念碑」のレプリカ

大正～昭和10年代(戦時中)

明治時代における初期の学校給食は、そのほとんどが経済的に恵まれない児童生徒、あるいは欠食児童を対象として実施されていましたが、大正時代に入ると栄養面をもあわせて考慮されるようになってきました。

大正8年、私立栄養研究所長・佐伯矩博士さいきたけは、東京府(当時)知事の支援を受け、府直営の小学校十数校に栄養パンを提供しました。

大正12年9月1日に関東大震災が発生します。震災後における被災地域では、臨時的施設で学校給食を行い救援活動が実施されました。これを契機に平時でも学校給食を行う学校もありました。この年の10月には、文部次官通牒において、児童の栄養改善の方法としての学校給食が奨励されます。

昭和7年から20年頃には、貧困救済を目的とした学校給食から、国が施策として取り上げるようになり、全国各地において就学奨励・栄養改善を目的とした学

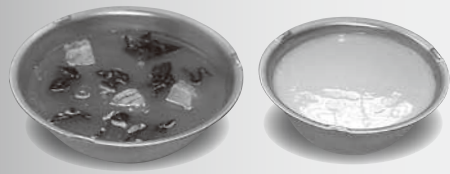
昭和17年(戦時中)



すいとんのみそ汁

中断

昭和22年(戦後)



トマトシチュー、ミルク(脱脂粉乳)

校給食として広がりを見せます。

しかしながら、第二次世界大戦の勃発に伴い、食糧事情は、年々厳しくなり、昭和20年頃には、ほとんどの学校で学校給食が中止となりました。

終戦後の状況

言語に絶する荒廃をもたらした第二次世界大戦は、昭和20年8月15日に終わりを告げますが、ほとんどの教育施設設備は、破壊焼失されており、正常な教育を行うことはほとんど不可能な状態でありました。わずかに残った学校の一隅や青空教室で細々と授業は続けられましたが、教師も子供たちも共に空腹を抱えての授業でありました。それでも全国で2,000校にのぼる学校では、地域の協力により代用食あるいは山菜等を活用した学校給食が一時期行われ、少しでも教育の停滞を避けるための努力が続けられていたことは注目される所です。

終戦直後の状況下において、また一方、教育制度そのものの変革が求められる中で、学校給食は、あらためてその重要性が強く認識されるようになってきました。しかしながら肝心の供給すべき食糧は、どこからも得られようがなく、同年の夏頃には、学童の栄養状態は、かつてない最悪の状態になってまいりました。

ララ物資と全国学校給食週間

昭和21年6月21日にララ(アジア救済公認団体の略称)から物資寄贈の申し出があり、連合軍総司令部と日本政府などとの受け入れについて協議を重ねた結

果、いよいよ戦後の学校給食が再開することとなりました。昭和21年12月11日に通達された文部・厚生・農林三省次官通達「学校給食実施の普及奨励について」は、学校給食の実施の方針をはじめて示した、戦後の新しい学校給食の基本的な通達となったのであります。

実施通達は示されたものの、国民全体が窮乏生活にあえいでいる時、全児童を対象にどのように実施したらよいか戸惑うことも多かったので、まず東京都、神奈川県、千葉県の子童約25万人に対して試験的に実施することになり、12月24日、東京都の永田町小学校でララ物資の贈呈式が行われました。この日が、我が国の戦後学校給食開始の記念すべき日となりました。



物資受領式後の給食風景視察

余談ですが、この日は、クリスマスイブであり、そのことは、連合軍総司令部などの意図したことなのか、それとも偶然であったのか？ それ以来数年間、この日を「学校給食感謝の日」と定め全国的に感謝の行事が行われました。さらにその後、冬休みとの関係上、1か月遅らせて1月24日から1週間を「学校給食週間」とし、現在も各地で記念行事などが行われています。

昭和27年



コッペパン、鯨肉の竜田揚げ、せんキャベツ、ミルク(脱脂粉乳)、ジャム

昭和39年



揚げパン、おでん、ミルク(脱脂粉乳)

ソフトめんと米飯給食の開始

学校給食を経験した特に年配の方に、もう一度食べたい献立はと問うと「ソフトめん」があげられます。戦後の学校給食の主食は、パンのみでしたが、昭和30年代中頃、麺業界において学校給食で麺を食べてほしいとの考えがあり、従来の麺では、学校給食に不向きだということで、試行錯誤の末、開発されたのが「ソフトめん」です。一般的なうどんは、中力粉や薄力粉を使用しますが、「ソフトめん」は、強力粉が使用されています。製造方法の工夫により、伸びにくく消化が良く中が柔らかいので、スパゲッティとしても使用できます。このため正式な名称は、「ソフトスパゲッティ式めん」といいます。昭和37年10月に全国ソフトめん協会が設立され、その後、学校給食で広く食べられるようになりました。

昭和51年4月から学校給食に米飯が正式に導入されました。米が日本の国民の生活において主食であることや、自給率の低下しつつある国内産農産物において幸いにして自給率100%を超えているという事実などから、学校給食に米飯を取り入れるべきであるとの声が、各方面から高まってきました。また、調査では、ご飯を希望する児童生徒が多かったようです。昭和45年から米飯給食実験校を設け、研究調査をしてきた結果、米飯給食の諸問題が明らかになってきました。献立の工夫や米の供給経路の確立など各種の条件整備を行いました。特に価格面において保護者の経済的負担増にならないよう学校給食用米穀は、政府が食糧管理法に基づいて買い上げた米を、消費者米価の35%値引

きとして供給されました。米飯給食の開始は、戦後の学校給食史上画期的なことだったと思います。

世界に誇れる日本の学校給食

現在の日本の学校給食は、学校給食法その他の法令に基づき、学校教育の一環として位置づけられており、そのためいろいろな取り組みが行われております。例えば、ひな祭りや節分などの年中行事に合わせた料理や郷土料理など。また、地元の食材を取り入れた献立や青空給食、バイキング給食など工夫をこらした魅力あるものとなっております。

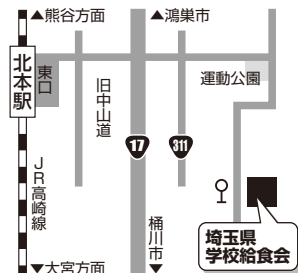
明治22年に山形県鶴岡町(当時)で始まった日本の学校給食は、戦争で中断しますが、昭和22年には、本格的に再開をして、現在の充実した魅力ある学校給食となってきました。このことは、その時代時代において学校栄養士をはじめ関係者の方々の努力と、そしてなにより「子供たちのために」との一途な思いにより実現できたことだと思います。学校給食は、日本が世界に誇れるものの一つではないでしょうか。

学校給食歴史館 (埼玉県学校給食会 敷地内)

埼玉県北本市朝日2-288
TEL:048-592-2115(代)
入館料:無料
開館時間:9時~16時
休館日:土・日・祝日
年末年始
夏期(8月13・14・15日)

JR高崎線北本駅から約3km
川越観光バス
「ワコーレ北本」下車

<http://www.saigaku.or.jp/profile/library/>



昭和40年



ソフトめんのおんかけ、甘酢あえ、くだもの(黄桃)、チーズ、牛乳

昭和52年



カレーライス、くだもの(バナナ)、スープ、牛乳

裏表紙へ続く



昭和56年



パン、いわしのチーズ焼き、
うずら豆入り野菜スープ、レタス、
くだもの(オレンジ)、ヨーグルトゼリー



学校給食歴史館 (埼玉県学校給食会)埼玉県北本市朝日2-288 <http://www.saigaku.or.jp/profile/library/>

平成元年



バイキング給食

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2017年 秋号】2017年8月31日 発行

表紙イラスト:堀江篤史

編集:教育出版株式会社編集局
印刷:大日本印刷株式会社

発行:教育出版株式会社 代表者:山崎 富士雄
発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp> 03-3238-6901 (配送について)



わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三條西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411